〔Ⅳ〕講　演
「生きる力」を育てるために
ー総合学習の試みー

和光学園長　丸　木　政　臣

そこにお配りいただいてあると思いますが、研究発表要旨の一番最後のところにですね、レジメがあります。「生きる力を育てるために」という、この「生きる力を育てるために総合学習の試み」というこの要項にそってお話をしていきますが、あのー、これから、実はいろいろ考えたのですが、ビデオを見ていただいた方が早いと思いまして、私の学校では小学生も中学生も高校生も総合学習という変わった教育課程を持っていますが、これは小学6年生の沖縄平和学習のビデオなんです。小学生も3泊4日で、今年でちょうど7回目なんです。初めは相当親の反対もありましたけど、ようやく定着しまして、みんなが心待ちするようになってきています。

毎年沖縄の平和学習のビデオを作りますけど、これは教職員も選挙で選んで、編集委員を設けます。生徒たちも生徒たちの代表を選んで、この両方の教員代表と生徒代表が全く同じ地平に立って、教師の発言力が強くなることを生徒はすごく警戒いたしますので、見ていただくと分かりますけど、かなり生徒たちの発言力が強いビデオであると思っております。

この中で協同製作されているこのビデオの中身というものは、もちろん学校の専門家が映した部分がありますし、各コース別に生徒がビデオを持って参加していますから、そのビデオから選んだものもあります。その総合的な編集過程がちょっとおもしろいと思いますから、ぜひそのへんも見ていただきたいと思います。終わった後、残りの時間だけ少しお話ししたいと思います。では、よろしく。

（以下、ビデオから）

基地の中に沖縄があるのか、沖縄の中に基地があるのか全然わかんなくなっちゃって、結構みんな考えていたんだけど、自分の親が子供を殺すというので……

（ナレーター）私たちの沖縄学習は去年の6年生から平和学習ノートをもらって始まりました。そして3月から1人1人の沖縄捜し。最初の沖縄のイメージはきれいな海、自然が一杯あるということでした。

（生徒） そして沖縄の中でガマの中で1年間ぐらいずっといて、強い兵隊と認められていたので……

（ナレーター） 総合の授業、夏休みの自由研究、沖縄の人にもらった手紙などで学んできました。そして今まで知らなかったことや、考えもしなかったことを、少しずつ考えるようになりました。今まで戦争ということは、私たちにとって全然関係のない、遠い一言ですませてきたことが身近な問題として考えられるようになりました。

（教師） 二十分ぐらいでアメリカ軍は占領したわけだよね。そうすると沖縄戦といっても、沖縄戦は4月1日からだとすると、ここで起こった沖縄戦の事実と……

（ナレーター） 沖縄戦は15年戦争の終わり頃にあった、米軍対日本軍の戦争です。沖縄戦は日本にとって唯一の地上戦なのです。一平方メートルあたりに50発もの弾丸が落ちてきました。海からは艦砲射撃、空からは爆撃と海からも空からも、そして陸からも攻められたのです。

1945年、4月1日に米軍が沖縄本島に上陸しました。最初に米軍は飛行場をねらい、そこから北部と南部と両方にどんどん攻めていったのです。北部はすぐ米軍に占領されました。南部では長い間にわたって持久戦がくり広げられたのです。

6月23日、牛島司令官は最後まで全力を尽くして戦えと一言残して自決しました。もしこの時に牛島司令官が、「もうやめよう。日本の負けだ。」と言ってくれれば、そこで沖縄戦を終わらせることができたのです。でもそれをしなかったために、その後も戦争は続きました。軍隊に司令を出す人がいなくて、どこへ行けばいいのか分かりません。そしてたくさんの集団自決なども起こったのです。沖縄戦では20万人もの人が亡くなりました。

（島袋） 4月1日、上陸が始まりますと、もう私たちが想像もしなかった兵隊さん、右腕がない者、左足がない人、それから背中をやられて、少しでも触れると「痛い！」と叫ぶ患者さんが、どんどん運ばれてきました。

（ナレーター） 島袋よし子さんはひめゆり学徒隊として戦争に参加しました。

（島袋さん） 腕の切断になりますと、もうどんな兵隊さんでも、どんな偉い人でもがまんできないですよね。麻酔もあんまり利きませんから。もうそれこそ壕全部に響きわたりながら「自分はもう死んだ方がましであります。殺せ、殺してくれー、よしてくれ、やめてくれー。」大きな声で言うんです。もうこの辺りにいる兵隊さんも、「どうせ助からないのに、よせばいいのに。」って。私たちももう耳に栓したいぐらい。恐いです。これが戦争なんです。それでも、みんな早く終わってくれればいいと思って。いつのまにか声が出なくなります。

（ナレーター） 壕に入った。中はすべりやすくて、まっ暗。ポタポタと水の落ちる音がする。人の骨を見つけた。それを見て、「あー、ここに本当に人間がいて、

そしてこのまっ暗な壕の中で死んでいったんだな」と実感した。その人たちは死ぬ前にきっと外に出て青い空を見て死にたかったのだと思う。その亡くなった人は平和を見届けて死にたかったのだと思う。

ガマから外に出た時、まるで別世界に出たような気がした。ガマに入ったことで、私の戦争に対する恐ろしさが、又一段と深まった……（以下、ビデオ略）

すいません、もう少し続くんですが、みなさんのお帰りが遅くなってもいけませんので、最後のまとめのお話しだけしておきたいと思います。

和光小学校のこの学習旅行というのは、語り部というのが中心になっているのです。この子供たちが沖縄で学習体験したことを、下級生たちに語り継いでいくんです。同時にちょうど11月の20日から和光小学校の全国公開教研が始まるんです。その時に沖縄に行った子供たち和光の子供たちに語るだけじゃなくて、和光の親にも、全国からお集まりの先生方にも子供たち語り部として語るんです。人間というのは自己体験というものを人に語ることによってですね、自分の中にもう１回、自分の体験を見直す、自分に語りかけていくという仕事が行なわれているわけです。

今日の小さな語り部たちの記録というのは、毎年の子供たちがこれを作っているわけです。これは冒頭に申しあげましたように、子供たちと先生方の編集委員で作っているわけなんです。作り方が子供たちですから、「これも入れろ、あれも入れろ。」ということがありましてね、45分間の中にいろんなものをほうりこみますから、分かりにくい点もあったかと思います。いかがたったてしょうか。本当はみなさん１人１人に感想をお聞きしなければならないんですが。

ビデオですね、ご覧になりましたとおり、おそらくこれをご覧になりました先生方やお母さん方はきっと心の中にはね、「あれは分かる」と、じゃあ、あの時間はね、との教科の時間を削ってやっているのか、とかね、その分だけその他の、例えば算数とか、社会科とか学力はつかないんじゃないか。学力はどうなってるんだと、いうふうなことがきっと疑問として残っているんだと私は思います。

しかし、むしろ私たちは、今日、学力とは一体何なのかと、子供たちに身をつけさせなければならない学力とは何なのかということが日本においても基本的に問い直されている時代にある、というふうに思っているんです。むしろそのことに対して真向から挑戦して、そのような学力をつけさせようとしている今日の日本の教育体制に風穴をあけるべきだという、ひとつ挑戦状のつもりで、私たちはこの総合学習というものをやっているんです。

この総合学習は今年で18年目を迎えております。中学校も高校も同じ様な歴史をたとっております。おそらく18年というのは、それだけの期間、日本の受験学力を中心とする、学力競争というものが、その間続いてきたという歴史だと私は思うわけです。

それで学力とは何かと問うた場合、それは言いかえるならば、先生方が文部省が作った学習指導要領というもの、あんまり文部省ががんばった割には先生方はお読みになっていない。それぞれの公立の先生方も高長先生や教頭先生はお読みになったとしても、普通の先生はあまり読みませんよね。でも学習指導要領を読まなくったって、学習指導要領に準拠して民間の会社が教科書を編集します。文部省が無償で配給しているわけですから、小・中学校の教科書は。無償なわけですから。例えば小学校の教科書は250円ですよね。中学校で500円のもありますけど。ただほど高いのはないといいますけと、ただだからこそ国に非常に厳しい検定があるわけです。私も戦後一貫して教科書の編集に携わってきましたけど、その教科書会社の編集長が「先生が教科書にかかわる時期じゃあ、もうなくなりました。」とお断わりを受けました。おそらくそういう形で少しでも物を言いたいという人たちが、教科書にかかわっている時代というのが過ぎて、本当に牙を抜かれ、そして闘う気力も失われて、みんないい子になってしまった執筆者が作った教科書というのは、全く指導要領に準拠しつくしているか、もしくは指導要領よりももっと中身を拘束された教科書を実は先生方は受け取るのだと思います。しかも指導要領ができて教科書ができて、教科書検定があって、それが現場の小学校の子供たちの手に渡るには少なくとも３年の月日がかかっていますよね。３年前の知識が今の子供たちに伝わるわけです。しかもそれは10年間教科書が変わることはないわけです。

それは算数であれ、理科の物理的なことであれ、あるいは社会科のある種の科目は10年たっても20年たっても変わらないかもしれません。でも、子供が変わり社会が変わる以上は、やはり子供に伝達すべき知識というものはいつも問い直される必要があると私は思っているんです。そういう指導要領に準拠し、教科書に依拠して先生方は授業するわけです。で、授業をする時にね、一番大事にされるのは一斉誘導式の講義式の授業でしょう。これはどんなにうまい先生でも発問をして、その発問によって生徒に誘導的に答えを引き出して、そしてその答えと問いとの繰り返しの中で最後まで授業を盛り上げていくというやり方で、日本は伝統的にこのやり方でしていると思います。

黒板の前に立って、チョークを握って、最近はビデオを使ったりしますけども、伝統的にそういう授業をしてると思います。先生方が発問を大事にするという

のは、発問をして子供に答えさせるという、その操作の中でね、授業を作っていくから発問を大事にするわけですが、では発問する先生方は何にも知らないで発問しているということは子供はみんな思ってませんよね。先生知っていて聞いているわけでしょ。知っていなければ聞けないわけでしょ。知っていて聞いて、そして誰かが正しい答えをするだろうと思っている。誰かがこの程度の答えをするだろうなあと思っている。そして授業中に、50分なら50分の授業の中で先生は発問して、生徒に答えさせるという操作を繰り返していくわけです。

ある子供が先生が期待している答えをずばり述べたら、その授業はそこでストップになる。次の問いをするわけです。次の問いをする場合も、上手な先生というのは、できない子供から当てていくわけです。もし上手答えを最初に当てたら、ずばりと本当のことを言われたら授業はもうそこでストップして次に進まなければいけませんから、できるだけ答えをまちがえるような子供から当て続けて、そして真中ぐらいの子供へずっといって、最後は先生の答えの代わりにずばり答えられる子供に当てるわけです。そしてその子供が「かくかく。」と言った時に、その先生が何と言うかといったら、「諸君、見てごらんなさい。授業をちゃんと受けているから、塾にも行っているから、だから、いい答えをするのだよ。君ら、拍手。」とかね、言うわけでしょ。

しかし、これは私はフィクションだと思っているのです。虚構だと思っているのです。先生が演じている一種の猿芝居だと思っているのです。だって先生が知らないで聞くわけないでしょ。もし子供の中に、「先生、いじわる、先生知っているならみんな答えればいいじゃない。」と、もし言う子供がいたらね、先生のこの発問と答えによって組み立てる問答式のフィクションは最初から壊れるんです。壊れないで、今、日本の授業が成り立っているというのは、学校というものの権威ですよ。学校というものの制度、文部省が教育を押しつけているこの制度によって、学校ではこの先生の発問と生徒が答えるという問答法の一斉誘導式の授業が一応成立しているわけです。

これは今や中学生や高校生になると、だんだん生徒の方がもう私語をやったり、授業中立ち歩きをしたり、便所へ行ったり、水を飲みに行ったり、授業がだんだん壊れつつある。そうなるのは当たり前のことなんです。こういうフィクションの授業をやっている限りはどこかで壊れるわけです。つまりこうして与えられている知識を子供が身に付けて、そしてペーパーテストの時に記憶力を駆使してぴしっと先生が教えた通りに答えられる子供の、その答えが「よくできた。」と言われるでしょ。でもその知識って何なのか。これは最近では「学校知」と呼ばれてます。学校の中だけで通用するんです、この知識は。「学校知」というものは「制度知」とも呼ばれるんです。何故「制度知」かといったら、それは文部省の作った指導要録と教科書によって教師という学校の権威を持った人が生徒に一方的に教授する、教えるという仕組みの中で成り立っている知識だから「制度知」なんです。

もう高校生ぐらいになった子供たちがね、学校の先生が語る「学校知」と「制度知」だけを、本当の人間の知識だと思うか、人間社会における真実の教養だと思うか。今、学力と言われるものはね、例えば今ビデオを見ながら、これだけでこの学校の子供は、この知識が足りてるか、学力が足りてるかと、もし疑いを持たれたなら、その学力とはきっと「学校知」・「制度知」のことだと思うんです。

「学校知」、「制度知」とは、現在では高等学校を受験する時の受験の知識である。あるいは高校から大学を受ける時の受験の知識である。あるいは偏差値である。そういう一定の社会的にその知識をよけいに持っている奴、正確な知識をよけいに持っている奴が、学校の校門を潜る時には通用しやすいという学力・知識が今日一般に「学力がある」、「知識がある」と言われることになっていると思うんです。

私達学校の教師は、少しでも子供たちの権利が尊重される。学校の中では子供たちは主体的に生き生きと学習するような、そういう学校にしたいと、みんな思います。みんな学校の中で子供が主人公で、学習の主体は子供で生き生きと楽しく、学校が毎日運営されるようにというふうに、みんな校長先生以下、願っています。

でも現実には山田洋二監督が作ったあの学校みたいに、みんなが夜間中学校に集まってきながら、30いくつ年を取った人もいれば、若い挫折感を持った中学ぐらいの子供もいる。その連中はお互いに、他人ができた時に「あーよかったね。」と喜ぶ。まちがいをしながらも先生が一生懸命励まして「がんばれ。」と言ってくれる。そういう人間と人間との息づかいが交流しあえるような生きた学校というのが今あるのか。そういうふうに１人１人の子供の人権が大事にされ、１人１人の子供の生きる喜びというのが保障されている学校があるのか、ということなんです。私は非常に数は少なくなっているのではないかと思うんです。もしかしたらこの名古屋大学の附属というのはそういうものを持っている、あるいは１つ前の学校の１つかもしれない、というふうに私は思います。

いや、それは受験に強いとか、強くないとかの問題ではないと思うのです。今や子供たちの人権というも

のは学校の校門でみんな立ち止まるのです。子供の人権というものは学校の校門に入るまではあるのです。校門に入る時にすっかりなくなってしまうのです。校門に、私の近くにある公立中学校では朝から校長先生も教頭先生も、生徒指導の主任の先生もみんな立って「おはよう、おはよう」とやってますよ。あいさつする時にもう一方の目付でいえば、「こいつ、よけいな物持ってきてるんじゃないか。タバコをポケットの中に入れてるんじゃないか」。そうして持ち物検査をする。あるいは髪の毛の検査をする。そういう目付があるわけですよね。そこでもう子供の人権は立ち止まってしまう。子供は外で持っている人権も学校の中での人権も全く保障される権利の主体者としての子供にしていく必要があると思うのです。

さて、私たちが総合学習をどうして考えたかというと、総合学習というのは、日常子供が持っている関心を（どの子供だって関心、問題意識、好奇心を持っている）そして、彼ら自身の力でチャレンジすることができるような問題を、先生と生徒が相談して、テーマを決めるんです。たから、小・中・高校と通してみますと、何回と繰り返すテーマもあります。例えば今回やった「平和」というようなテーマは小・中・高校とやります。

その他に、「差別」の問題。私の学校では障害者がクラスの中に２人すつおります。健常者と障害者の協同教育をやっておる学校ですから。そうすると差別する気持ちがなくても、身心に障害を持っている子供は、今自分は差別されていると思うかもしれない。そういう差別の問題は、すくみんなの総合学習のテーマになりやすい。

あるいは「人権」なんていう問題も、憲法たって教育基本法だって、紙の上では人間の権利も認めるなんて書いてあるけと、日常的に本当に人間の権利を認めているかといったら、あの新宿の西口あたりを見ると、２メートルおきぐらいに、ホームレスの帰る家もないような人がすっと寝ているでしょう。朝になったら、あの人たち何人か死んているわけですよね。人間が飢えて死ぬというのは何もアフリカなどの問題だけではなく、日本にも現にあるわけです。と、子供たちはみんな疑問に思うわけです、湾岸戦争で４分の１の軍費を負担した日本。130億ドルのお金を出した日本が、この街の片すみて毎日人が死んている。飢えて死んでいる状況を放置している国か人権の国てあるかということを、みんな疑問に持つ人です。

あるいは、有害食品の問題。食品公害の問題。あるいは玉川の汚染の問題。子供たちは川下の川崎から上水まて歩くんです。そして玉川というものを考える。あるいは性の問題、中学生や高校生になったらエイズの問題などあります。あるいは最近は崩壊する家族も本当に多いですね。

こういう身近な問題をとらえながら、子供たち自身が子供たち自身の問題意識で調べるし、自分たちで歩いて知識を吸収するし、人々に出会ってインタビューして教養を身に付けます。

もちろん大人で解決できないことが、子供たちが学習したからといって簡単に解決できる問題ではありませんよね。さっきもビデオでご覧になりましたように、安保の見える丘を見て夜も興奮したあの学習の討論だって、「まっちゃん」というあの子供１人がいるということがどれだけこの学級では討論が盛りあがったか。そこでお互いにやり取りがあるから、自分の考えも深まってくるわけでしょ。学級に必ずああいう子供というのは１人２人いるものなんです。

私はそういう中で思いますけれど、数学にしろ国語にしろ、みんな基礎学力という先ほともいった「学校知」は必要なんだと思います。でもそういう「学校知」だけではなくて「学校知」プラス生活に生きる「生活知」、あるいは社会そのものを理解する「社会知」というものも必要たと思うのです。国が用意した一定の定食メニューだけではなくて、子供たちが自分たちで学んだ「生活知」と、「学校知」を合わした形で、本当の認識は深まっていくんだと思います。

これは私の学校の子供の話しではありませんけど、「受験のために数学の公式や英語の単語をよけいに覚えるたけが勉強ではないと思うのです。自分の好きなことを精一杯にやるのも勉強たと思うのです。大人は勝手に高校を分類して、あの子はあの難かしい高校に行ってるから偉いなどと言いますが、高校によって人間の値打ちが決まることはないと思います。学歴社会て多くの人がいい大学を目さすので、受験のための勉強が大事にされ、受験に役に立たないことはどんなに生きる知恵と思われることでも、カットされてしまいます。勉強することが生きる力になり、人間の全体を豊かにすることにならなかったら嘘だと思います。先生も受験のために頑張ろうと言うし、みんなもこせこせがつがつしてるし。早くこんな中学生活終わらないかなあと思います。何だか窒息しそうな毎日です。」

これは千葉市の安田さんという子供が、少年朝日に投書したものです。私、本当にこの通りだと思うのです。今中学校はこういう意味て無味乾燥になっているんですね。「学校知」や「制度知」という決まりきったものを、子供たちがどれたけ覚えたかという、それだけを教師が教えていたらとうしても子供たちは、そういうことたけを大事なものとしてしまう。

この子は和光高校に昨年入学しました。和光高校入って初めて、こういう総合学習などという勉強が

あったんだと思ったようです。まあ、和光高校なんてところは職員室は生徒の溜まり場ですからね。生徒と先生は同じレベルで話すんです。最初よそから来た子供はびっくりするみたいだけど、そういうものじゃないか。山田洋次監督の映画みたいに生徒が本当に学校の中で楽しむことができれば、それでいいんじゃないかと私はそう思います。

文部省の学習指導要領が高校にも適用されますが、最近「新学力観」ということが言われますよね。新学力観という言葉が代表しますのは、知識や理解や技能という今まで大事にされた「学校知」よりも、関心・意欲・態度の方が大事にされる、ということです。だから観点別評価という指導要録や通知表の項目を見ますと、関心や意欲や態度の方が先に付けられてしまう。で、知識・理解・技能の方が後になるんです。だから勉強がよくできなくても、関心や意欲が非常にあるから君はいい子だねということになるわけです。

一昨年ですか、国立研究所の研修部長の長島さんがNHKのテレビでいいましたよね。履習は10割だと。分かる子供は3割でいいのだと。分からない7割の子供、7割の親に対しては関心、意欲があればいいんですと。

でも私はそれはおかしいと思うのです。知識や理解や技能を追求する中で関心・意欲や態度が身に付かなければおかしいと思うのです。とはいえ、私は新学力観と言われる関心・意欲や態度がどうでもいいとは思いません。関心・意欲・態度も大事だと思うのです。が、なぜ関心・意欲・態度がなくなってきたかと言ったら今みたいに朝から晩まで知識、受験勉強で追い回してそれで学校終われば塾・学習塾に行かせていれば、関心・意欲・態度はなくなるのが当たり前と思うのです。

冒頭から申しましたように、知識の記憶だけに重点をおいて、その知識を応用して自分の意見を作ったり、そして討論をやったり、自分で行動を作りあげたり、あるいは社会活動に参加するとかいうように、自分の知識をもとに創造的な思考を作っていかなかったら、関心や意欲、態度はなくなると思います。だから単に文部省は関心、意欲、態度を身に付けろと言うのではなく、関心や意欲や態度がなぜ付かないのかを考えなければいけない。それは今のような競争教育ばかりをやっていたら、「学校知」を身に付けた記憶力の競争にはなるかもしれないけど、それは偏差値バカ、偏差値バカというのは、人格が育ってないわけですよ。人格が育ってなければ関心・意欲・態度というのは実は身に付かなかったというわけです。

難かしい東京大学の理IIIを突破して、そして東京大学の医学部を出て、そして東京大学の附属病院に勤めている医師が、今年春賑わしたでしょう。女子高校生を次から次へ医局から持ち出した高度な睡眠薬で眠らせて乱暴狼籍の限りを尽くしていたということが出ていましたよね。こういうのが偏差値バカと言うんです。偏差値は高いのかもしれないけど、人格的にはまさに劣悪そのもの。

だから私はね、そんなに偉くなくてもいいと思う。労働者でいいと思う。人からつまはじきをされないで、仲間と一緒に本当に、自分自身だけがいいと思わないで、今日でてきた、「まっちゃん」みたいなのを弾き出さないで、一緒になっていい事やっていこうじゃないかと、日本が平和になるためにはみんなが力を合わせなければならないんだというような子供を作ることが根本だろうと私は思っているんです。

長い間私の総合学習の話を聞いてどうもありがとうございました。（拍手）

（文責　研究部。一部省略しました。）